

論文の要旨

論文題目	Re-marking the Boundaries: Towards Subversion of the Mechanism of Discourses Producing and Reproducing Social Discrimination
氏名	溝上由紀
学位	博士（文学）
授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日

1 本論文の目的・意義・方法

本論文は、特に言語の政治的作用に注目しながら、さまざまな支配 / 被支配の権力関係が産み出され自然化していく過程を分析したのち、社会的不平等を永続させる言語作用を弱体化し、支配構造に抵抗するための方策について考察することを目的とした。社会には、性差別、人種差別、言語差別などのさまざまな社会的差別が存在するが、特に現代においては、多くの文脈において、男性、西洋、白人、英語（話者）などによる社会・文化・経済支配が定着しているように見える。本論文では、この支配関係を成立させている境界を再標記(re-mark)することにより、支配と差別のメカニズムを転倒する方策を探った。

本論文の意義は、まず第 1 章において、言語の政治的作用、すなわち、社会における支配 / 被支配や差別 / 被差別の権力関係を生産・再生産する言語の働きと、その権力関係の弱体化の方法についての独自の理論仮説を組み立てたことにある。仮説の内容は、社会でいわゆる「常識」「真実」として権力を持っている表層構造としての「主流のディスコース」は、その深層構造に、イデオロギー的な二項対立である「制度化されたディスコース」をもっており、社会的支配構造を転倒するためには、主流のディスコースではなく、制度化されたディスコースを弱体化する必要がある、それには、二項対立の境界を再標記し続けることで境界を不確定なものにしていく方策が有効ではないかというものである。筆者のディスコース論の仮説を普遍的に証明するため、本論文では、3 種類のケース・スタディを試みた。第 2 章では、男性中心主義的な「男 / 他者（女）」という権力的な二項対立が、社会言語学の研究の中で生産・再生産されていく過程を考察した。その後、「男 / 女」という二項対立の境界を弱体化するため、筆者が行った若者の言葉使いについての調査の結果を分析することにより、「男 / 女」の境界が実際には曖昧で不確定であることを証明した。第 3 章では、西洋中心主義的、英語中心主義的

な二項対立、例えば、「西洋／他者（東洋）」、「英語（話者）／他言語（話者）」、「白人／他者（非白人）」、「アングロサクソン系／他人種」などの権力的な二項対立が、世界で構築され定着してきた過程を歴史を追って考察した。その過程で、日本の若者の考え方の中に西洋中心主義、英語中心主義がいかに深く根づいているかを、筆者が行った調査結果に基づいて分析した。その後、非英語話者が、自らの言語を使って英語を多言語が混ざりあったハイブリッドな言語として作り上げていくことにより、「英語／他言語」の二項対立を徐々に弱体化できる可能性があることを主張した。第4章では、植民地支配の文脈における言語の政治的作用について考察した。特に植民地支配者の言語である英語を主公用語として採用し、経済発展を成し遂げたシンガポールに着目した。ここでは、シンガポールの学生に行った調査結果に基づいて、英国の植民地支配が植え付けた「優等な支配者／劣等な被支配者」という権力的な二項対立が、独立を果たした現在もなお、シンガポールの人々の考えの中に根づいていることを示した。そのうえで、シンガポールの人々が、その二項対立を弱体化するためには、シンガポールにおける唯一の独自の言語である「シングリッシュ」をアイデンティティの言語として採用することが鍵となるだろうということを主張した。

2 各章の要約と今後の課題

< 第1章 >

本章においては、言語の政治的作用とその転倒可能性について、筆者独自の理論仮説の構築を試みた。社会的不平等を維持する働きをする言語の政治的作用についての仮説を構築するさいに、ジー (Gee) やフ・コ・ (Foucault) やカルチュラル・スタディーズの理論家たち(ホール (Hall) など) の理論を援用し、発展させた。本論のキーワードは、ディスコース(Discourse)、主流のディスコース(Dominant Discourse)、制度化されたディスコース(Institutionalised Discourse)、識字(literacy)、イデオロギー、境界不確定性 (boundary ambiguity) などである。

言語を習得するということは、ある集団に共通して期待される方法で自然に物事を考え解釈する方法を身に付けるようになることである。言語の政治的作用を考察するにあたって、筆者はまず、ジー (1996) によって提唱された「ディスコース」の概念を採用した。ジーによると、ディスコースは、「言葉、ふるまい、価値判断、信念、態度、社会的アイデンティティ、ジェスチャー、目つき、身体、洋服等を統合した生活様式、あるいは社会でのあり方全般」であり、ディスコース内のメンバーがどのようなときにどう言い、考え、ふるまうべきかを規定するものである。人は社会化の過程でそれぞれ複数のディスコース、例えば、日本人・女性・教師などのディスコースを習得する。ディスコースは合意のコミュニティであり、そこでは誰がよいメンバーで誰がそうでないか、何が普通で何がそうでないかなどの二項対立の合意が存在する。

ディスコースには多くの種類が存在しており、それぞれがヘゲモニーを争っているが、多くの場合、社会の政治的・経済的・文化的な支配階層のディスコースに所属するメンバーによって意識的・無意識的に構築された特定のディスコースが「真理」あるいは「常識」などという形で社会で広く承認されていく。それらは繰り返し書かれ話されることによって、また数々の関連するディスコースの理論基盤になることによって社会で広く合意を得て、最終的に、動かしがたい真理として多くの人々の間に根づくのである。本論の中で、筆者はこれらの「真理」や「常識」のディスコースを「主流のディスコース」と名付けた。「主流のディスコース」の重要な点は、それが常に価値中立的で自然で必然なものとして社会で提示されるということである。主流のディスコースが絶対的な真実を述べているかどうかは問題にはならない。主流のディスコースは、男性や西洋(人)や白人や英語話者や中流階級などの現代社会の強者＝権力者の価値判断を反映することが多いため、結果として既存の社会支配構造を正当化する役割を果たす。

現代社会では、多くの場合、男性や西洋(人)や白人や英語話者などのディスコースが他のディスコースを抑圧しながら、社会の主流の地位を保っている。重要なことは、強者のディスコースの存在は、必然的に弱者の存在、すなわち基準/逸脱や基準/他者などの二項対立の概念を示唆しているということである。何千年もの間、人間の思考は二項対立の思考のもとに成立してきたが、これらの二項対立においては、一方の項に特権的な価値を与えられる場合が多く、イデオロギーの機能によって、人々は一つの項に大きな価値を見出すように誘導される。このような二項対立の思考の作用により人々は、男性が基準で非男性(女性)が逸脱であり、白人は非白人に比べて優等であり、(ネイティブの)英語話者は他言語の話者より価値があるというような信念を植え付けられる。性差別や人種差別、言語差別などとの関連において、筆者が特に本論の中で問題にした二項対立は、「男/他者(女)」、「白人/他者(非白人)」、「アングロサクソン/他者(非アングロサクソン人種)」、「英語/他言語(非英語)」、「支配者/他者(被支配者)」などの二項対立である。これらの二項対立は、過去から現在にいたるまで不平等な社会関係を正当化し、それを再生産する役割を担ってきた。言い換えれば、これらの二項対立は、思考の深層構造として存在し、人々の思考を規定してきたのである。本論で、筆者は、これらの二項対立をすでに制度として人々の思考に定着して「所与のもの」となっているという意味で、「制度化されたディスコース」と名付けた。

筆者は、社会における制度化されたディスコースと、主流のディスコースの関係を次のように仮定した。主流のディスコースと制度化されたディスコースはそれぞれ表層と深層の関係にあり、前者は常に目に見える形で提示される一方、後者は既存の社会構造を維持するために主流のディスコースに強い影響を与えていく。主流のディスコースは、支配側の人々からも被支配側の人々からも、常に繰り返し明示的に提示され、社会で広く合意を得ていく。制度化されたディスコースは明示的に語られることはあまりなく、その意味で不可視である。ディスコースのメカニズムにおいては、主流のディスコ

ースが社会で合意と承認を得ることにより、制度化されたディスコースが結果的に強化される。

筆者は、私達が既存の価値基準を転倒させようと試みるならば、表層構造である主流のディスコースを解体するのではなく、その深層構造である制度化されたディスコースを弱体化しなければならないと考えた。そのために、既存の慣れ親しんだ物の見方を転倒するための手段として「境界不確定性」という概念を使用することにした。以下の議論では、「男/女」「英語/他言語」などの制度化された二項対立の間で、その境界線を再標記していくことにより、境界を不確定で曖昧にしていき、二項間の対立関係を弱体化していく方策を探った。この方法を通して最終的に制度化されたディスコースを転倒する可能性を主張した。

< 第2章 >

本章以降では、第1章で構築した言語の政治的作用とその解体可能性についての仮説を、具体的な事例に当てはめながらケース・スタディを試みた。本章においては、社会で女性差別がどのように維持されてきたのかを考察するため、社会言語学における「女ことば」研究を取り上げた。具体的には、「男/女」という制度化されたディスコースが、「女ことば」研究の中の主流のディスコースである「女性は「女ことば」を話す」というディスコースの構築過程において、いかに大きな影響を及ぼしたかを分析した。「女ことば」研究はこれまで、伝統的な言語学者とフェミニストの言語学者の両方によって担われてきたのだが、それぞれ立場は違っても結局、男性と女性は異なった話し方をするということが彼等の調査研究によって証明されてきた。

本章では、まず英語と日本語における女ことば研究を批判的に概観し、言語使用における性差についての社会言語学的研究が、「男/女」という制度化されたディスコースの影響をいかに大きく受けたものであるかということを示した。女ことば研究における主流のディスコースは、男性中心主義イデオロギーを内包した「男/女」という二項対立のディスコースにより生み出された産物であるといえる。社会言語学の方法論における基本的前提は、男性中心主義的な「男性が基準で女性が逸脱」という考え方に立脚していることが多く、言語と性差にかかわる研究は、男性と女性の話し方の違いを探し出して確定するという作業が中心であった。結果、言語学という主流派のディスコースの識字者である伝統的な言語学者と、フェミニズムという対抗ディスコースの識字者であるフェミニストの言語学者は、「男/女」という制度化されたディスコースが生み出した「女ことば」という社会言語学における主流のディスコースを再生産し続けてきたことになる。言い換えれば、支配側の人々（この場合は伝統的な言語学者、男性）と、被支配側の人々（この場合はフェミニスト言語学者、女性）が歩調を合わせて、男性の優等さと女性の劣等さや、男性と女性との違いを研究によって示しつつ、「男/女」という明確な境界を維持するとともに、女性の抑圧を正当化してきたのである。このよう

に、制度化されたディスコースの危険性は、現状を維持するための主流のディスコースを生産・再生産していくことにより、被支配側の人々が自らの抑圧に合意し続けるように仕向けることである。

このようにして、「男/女」という制度化されたディスコースは、社会で「真理」あるいは「常識」と呼ばれる主流のディスコースを作り出し維持してきた。女性差別を強化するこの制度化されたディスコースを弱体化するために、ある発話が男性のものか女性のものかを明確に決めることの難しさ、すなわち、男性と女性のことばの境界の不確定性を考察した。その過程で筆者は、短期大学の学生たちの協力のもとで行った、若者の敬語使用についてのアンケート調査とインタビュー調査を分析し、若い男性のことばと女性のことばの間に大きな違いは見られないことを示した。調査結果は、女性は男性よりも丁寧な話し方をするという傾向を示すものではなく、むしろ逆に、若い男女の間では、男性のことば使いと女性のことば使いはどちらかというかなり似通っていることを示唆するものであった。言い換えればこれは、主流のディスコースの主張に反して、男性のことばと女性のことばの境界線は実際には曖昧で不確定であり、文脈ごとに、常に再標記されているということを示すことになる。

< 第3章 >

本章においては、近年、常識として言われる「英語は世界語である」という主流のディスコースを扱った。このディスコースは、言語差別、人種差別などの社会的差別の維持・再生産に関与しているといえる。「英語は世界語である」という主流のディスコースは、「白人/他者」「英語/他言語」などの制度化されたディスコースをその深層構造としており、またこれらの制度化されたディスコースは、アングロサクソン中心主義や英語中心主義などのイデオロギーを内包している。本章ではまず、この主流のディスコースと制度化されたディスコースが現代の世界に深く根付いてきた過程を歴史を追って概観した。

16世紀の終わりまでは、「英語は世界語である」などというディスコースは存在せず、英語は1つの地方言語にすぎなかった。しかし、16世紀末から英国が国力をつけるにつれて、英国人は言語的・人種的自信をつけるようになった。この自信は「テュートンマニア」イデオロギーによって17世紀も存続し、人々は英語はラテン語などの古典語やフランス語などのヨーロッパ語と同程度に優れていると考えはじめた。その後、18世紀の産業革命時代に英国が牽引力となったことで、英国人の言語的・人種的自信はさらに堅固なものとなり、帝国主義イデオロギーに支えられて、アングロサクソンの白人とその言語である英語は優等であるとの言説が明示的に語られるようになった。20世紀にアメリカ合衆国が世界で経済的、軍事的、文化的権力を握ると、英語は経済開発・近代化・文明化のために役立つ道具であるなどという言説が流布し始めるが、一方において英語や白人の本質的優位性が明示的に語られることは少なくなった。この現象

は、19世紀末から20世紀にかけて、「白人/他者」、「アングロサクソン/他者」、「英語/他言語」などという制度化された二項対立のディスコースが定着した結果であると見ることができる。同時に、それらを反映した「英語は世界語である」という一見中立的な主流のディスコースが語られるようになったのである。

「英語は世界語である」という主流のディスコースと、その深層にある制度化されたディスコースは、今日の人々の心に深く根づいているように見える。そのことを確認するため、筆者は、短期大学の学生の協力のもとで、英語や西洋や白人に関して日本人が持っているイメージについてのアンケート調査とインタビュー調査を行った。調査の結果、概して、制度化された二項対立のディスコースが、学生の中に深く内面化されているということが明らかになった。

「英語は世界語である」という主流のディスコースに対して、今日、2つの代表的な対抗ディスコースがある。その1つは、英語帝国主義に抵抗して英語以外の言語の話者に言語権を与えることを提唱するディスコース (linguistic human rights Discourse) で、もう1つは、世界のさまざまな種類の英語も英語とみなそうとするディスコース (World Englishes Discourse) である。これらの対抗ディスコースは、実は、被支配側の人々の言語の権利を主張しすぎることにより、結果的に被支配側の人々を被支配者の位置に閉じ込めたままにして、既存の力関係の維持に貢献してしまう危険性をあわせ持つのではないかと考えられる。これらの対抗ディスコースに潜む危険性は、第2章で扱った女ことば研究が、「男/女」という優等/劣等の区別を前提として行われ、男性と女性の言語の違いを強調することによって、結果的に女性を抑圧的な場所にとどめおいてしまう危険をはらんでいるという点に類似している。そこで、英語が広く普及した現代のグローバル化社会において、「英語/他言語」などの制度化されたディスコースを弱体化していく戦略の可能性の1つとして、非英語話者にできることは、自らの言語文化や語彙などを積極的に英語に取り込ませていくことで、英語をハイブリッドな産物として作り上げていき、英語と他言語の境界を少しづつでも再標記していくことではないかと主張した。

< 第4章 >

本章では、人種差別や言語差別などに関わる植民地主義の文脈を考察の対象とした。具体的には、「(優等な) 支配者 / (劣等な) 被支配者」という制度化されたディスコースと、それが生み出した「言語政策と教育政策」という主流のディスコースを、シンガポールを例に取りながら考察した。シンガポールは、かつて英国の植民地であったが、支配者の言語である英語を主公用語として採用し、大きな経済発展を成し遂げた稀な例であるといえる。新植民地主義イデオロギーなどを内包する「(優等な) 支配者 / (劣等な) 被支配者」という制度化されたディスコースは、支配者の言語や文化などを優等なもののみとし、被支配者の言語や文化などを劣等なもののみとする二項対立であり、そ

れには、「英語／他言語」という制度化されたディスコースも含まれている。本章では、シンガポールにおける言語政策と教育政策のディスコースが、いかに色濃く「支配者／被支配者」の制度化されたディスコースを反映しているかを示し、そのうえでこの制度化されたディスコースを弱体化する可能性を探った。

はじめに、英国の植民地政府と、その後の独立シンガポール政府の言語政策と教育政策を概観した。そこにおいて、独立後の「言語政策と教育政策」という主流のディスコースが、「支配者／被支配者」という制度化されたディスコースを強化し、結果的にシンガポールの英語エリートと元植民者である英国の利益になるよう既存の社会状況を維持する働きをしてきていることを示した。主流のディスコースによると英語は、シンガポールの全ての人々が平等に利用できる言語、国内の異なった民族・言語間を結び付ける言語、中立的な道具として機能することのできる言語である。主流のディスコースは、人々の合意を得るために英語の利点だけを強調し、かつての支配者の言語をシンガポール内で最も重要な言語と位置付けてきた。一方で、英語が植民地支配の言語であり、また言語帝国主義の言語であり、社会的な不平等を生み出す言語であるという負の部分については不可視の状態のままにしてきた。

この主流のディスコースと制度化されたディスコースが、どの程度にシンガポールの人々に定着しているかを調査するために、シンガポール国立大学の学生の協力を得て、若者の英語観についてのアンケート調査を行った。さらに、日本の短期大学の学生にも似たような設問でアンケート調査を実施し、両国の若者の意識を比較・検討した。調査の結果、シンガポールの学生は、概して英語に対して肯定的な見方をしているが、同時に、英語に対する不安定で矛盾をはらんだ感情も見せた。シンガポールの学生は、英語は自分たちの言語であり、もはや植民地支配者の言語ではないとみなしているにもかかわらず、一方で、英国標準英語が規範とすべき英語であり、シンガポールの英語（シングリッシュ）は正しくない英語変種であると考えていた。自分たちの言語に自信が持てないというこの心理的歪みは、まさに主流のディスコースと制度化されたディスコースが、人々の中に形成したものと見え、この不安感がシンガポールの人々を被支配者の立場にとどめるための装置になっていると考えられる。

この心理的歪みを乗り越えるために、シンガポールが今後取るべき道ののひとつは、シンガポールで唯一独自の言語である「シングリッシュ」を、自信と自負心を持って自らのアイデンティティの言語として確立していくという方向性ではないかと考えた。シングリッシュは、シンガポールの現地言語である中国語やマレー語やタミル語が、英語を独自の形で取りこみながら、多言語の境界を融解することにより生み出された言語である。シングリッシュはシンガポール人が産み出したものであり、単なる英語の変種とみなされるべきものではなく、ハイブリッドなシンガポール特有の言語と見られるべきである。言い換えれば、英語、中国語、マレー語、タミル語などが混在するシングリッシュは、「英語／他言語（中国語、マレー語、タミル語など）」という制度化されたディス

コースの境界の間に、境界そのものを再標記しながら存在しているのである。このことから、シンガポールの人々は、シンガポールの唯一の土着言語としてのシングリッシュを自信をもって自らの公用語として位置付けていくべきではないかと主張した。

< 今後の課題 >

本論文では、筆者のディスコースのメカニズムの仮説を、3つのケースに応用してみることによって、普遍的に証明することを試みた。本論文では、女性差別、人種差別、英語による言語差別などを扱ったが、社会における差別の種類はこれだけにとどまらない。今後は、自らのディスコース論の普遍性をさらに詳細に調べていくことが課題である。具体的には、一方ではシンガポールだけではなく、他の様々な国における英語の位置についての研究を進めつつ、もう一方で、植民地支配の言語の1つであるといえる日本語の韓国、台湾などでの位置についての研究をすすめていくことにより、ディスコースの問題を多くの異なったベクトルから研究していきたいと考えている。